



Title	「屈」と「窮屈」：平安時代の公家日記を中心に
Author(s)	小山, 登久
Citation	語文. 1983, 42, p. 12-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「屈」と「窮屈」

——平安時代の公家日記を中心に——

小山登久

(一)

本稿は、平安時代の公家日記に見える「屈」字の意味を推定し、仮名文学における「くつす（くんず）」との関係を述べて、更に「窮屈」の語のわが国における意味について言及しようとするものである。

まず、平安時代の公家日記に見える「屈」字の用例を次に挙げる。

- (1) 就中老屈之身太以難耐、一夜種く定已及深更、心神悩、「小右記、長元1・11・29」
- (2) 伝聞、昨日晩定基僧都卒去云々、日米飲食不受用、経日衰屈、遂以死去云々、（左経記、類聚雜例、長元6・4・12）
- (3) 于時及深更、往反之間無為方屈了、（春記、長暦4・8・5）
- (4) 從今日可奉七ヶ日仮文之由執申……（中略）……予已屈了、仍為休身所思也、（春記、長久1・4・14）
- (5) 経月華門并階下参陣方、（前略）命云、須着南殿、而屈了、補遣、永承3・3・13）
時々休息可参上也、即着給陣、（春記脱漏）
- (6) 自内有召、夜前供奉御幸之間、無極屈畢、仍申所勞之由畢、（中右記、寛治1・2・11）

(7) 侍人奉於六条殿、事趣者、大雨。合屈候由、（後二条師通記、寛治4・12・21）

(8) 予則退出、須参御共也、雖然数廻間無術屈、仍早退出、（殿曆、康和4・6・1）

(9) 受領沙汰之間及辰尅、欲除目了之間、左府成文渡右府令結之、未聞、若親間如此歟、又老耄之廻終夜屈して如此歟、不知先例、可尋、（殿、暦永久5・1・20）

右の例(9)に「屈して」とあることから、これらの「屈」字は「くつ（屈）す」という漢語サ変動詞の表記であることがわかる。「くんず」との関係については後述する。

しかし、これらの「屈す」は、中国側の「屈す」の語義をもってしては意味が通じない。それでは、いかなる意味を表すのであろうか。

右の諸例の中で、「屈す」の語と文脈上、深い関連をもつて共用されている語及び語句として、(1)「老」(9)「老耄之廻」、(2)「衰」、(3)「往反之間」、(4)「身を休む」、(5)「休息」、(6)「所勞」、(7)「大雨に会ふ」などが挙げられる。

例(4)(5)では、「屈す」が「身を休む」「休息」の原因となっていて、

(6)では「所勞の由申す」の原因となっている。また、(3)では「往反」することが、(7)では「大雨に会ふ」ことが「屈す」の原因となっている。

これらの事実の上に、(1)「老」・(9)「老耄之剋」、(2)「衰ふ」を考慮に入れると、「屈す」は「身体(心も含めて)」が悪い状態になる」意を表しているものと推測される。

なお、時期が少し下るが、『玉葉』に、

(10)今日、故摂政殿御月忌也、然而、去夜屈無術、仍不參仕、可謂遺恨云々、(仁安2・5・26)

とあって、この「屈す」の意味は、(10)の前日の記述に、

(11)依_レ有所勞、如_二只今者、難_レ參、(同、仁安2・5・25)

とあるので、やはり「身体(心を含む)」が悪い状態になる」意を表すと推測される。

更に、公家日記ではないが、平安時代に、同じ記録体で記された『明衡往来』に、

(12)今夏炎氣倍於例年……(中略)……且_レ往反之間_レ嚴牛可屈歟。(上本、少納言源)

とあって、「屈す」は人だけでなく動物にも使われているが、「例年より暑い夏に往反すること」が、「屈す」の原因となっているので、この「屈す」も前述の意味に同じである。

以上のことから帰納して、

(13)須今日_レ帰洛、而人馬共屈了、仍明旦可_レ帰之由示別当了、(左経記、長元1・3・13)

の「屈す」もまた、前述の意味に等しい。

しかし、「身体(心を含む)」が悪い状態になる」とは意味範囲が

広すぎる。具体的にはいかなる意味であり、いかなる日本語に換言されるべきものであろうか。

ここで、更に平安時代の公家日記における「屈す」の語例を挙げると、

(14)宮被仰云……(中略)……連日饗宴、人力多屈歟、(小右記、長和2・2・25)

(15)今日節会、称物忌之田不參、多是夢想不閑之上、年老精進身已屈也、(小右記、寛仁2・1・16)

(16)今日請六箇日假、_{融座、權由}奔波間身力已屈了、本性稟厓弱之故也、(春記、長久1・4・15)

(17)予今夜宿侍、不論昼夜奔營、筋力已屈了、不知為方、(春記、長久1・9・20)

(18)身力已屈、不能出仕、(帥記、承暦4・5・9)

(19)心力已屈、終日蝶臥、(帥記、承暦5・1・22)

(20)予終日祇候、依力屈、示付少納言云、若御産氣急者可告者、仍白地退出了、(帥記、永保1・4・17)

(21)次僧侶為先威從、入自長楽門昇着之中、永超律師被扶從僧參上、暫居高座下欲昇着、有力屈不能昇氣色、(帥記、永保1・6・18)

(22)成清力屈申障、及十三度被免了……(中略)……次還御、予依身力屈竊以退出了、(帥記、寛治2・8・7)

のようであって、時期が少し下るが『明月記』にも、

(23)曉婦冷泉、依心神屈不出行、(承元1・2・7)

とある。

もっと具体的に「屈す」のかという、「屈す」の主体が記されていない。

すなわち、「屈す」が単独で使用されているのに対して、これらの諸例では、「屈す」の主体が明示されている点で異なる。

すなわち、「人力」「年老い精進の身」「身力」「筋力」「心力」「(心身の)力」「(身体の)力」「心神」などが「屈す」の主体になっているが、それらの主体が、精神の力や肉体の力に限られている点が注目される。

ところで、これらの「屈す」はどのような意味であろうか。ここで、中国側の「屈」の語の用例を見てみよう。

④食太侈不_レ顧_二其後_一 俄則屈_二安窮_一矣。 屈_レ竭也。(荀子、卷第二、榮辱篇、第四)

⑤脩_二火憲_一、養_二山林藪澤草木魚鼈百索_一、以_二時禁苑_一、使_二國家足_レ用而財物不_レ屈_一、虞師之事也。 屈_レ竭也。(同、卷第五、王制篇、第九)

第九

⑥夫太上之道、生_二萬物_一而不_レ有_一、成_二化像_一而不_レ弊_一。…(中略)忽兮恍兮、不_レ可_レ為_レ象恍、恍兮忽兮、用不_レ屈兮、屈_レ竭也。幽兮冥兮、應_二無形_一兮、遂兮洞兮、不_レ虛動兮。(淮南子、卷一、原道訓)

⑦初一、中冥独達、迴迴不屈。 屈_レ盡也。(太玄經、卷第一、達)のように「屈、竭也」「屈、盡也」とある。

また、『広韻』に「竭_二盡_一」とあり、わが国の古辞書では『篆隸万象名義』に「竭_二盡_一」とあり、『観智院本類聚名義抄』に「屈_二ツキヌ_一」「竭_二ツキヌ_一」「盡_二ツキヌ_一」、『色葉字類抄』に「尽_二ツキヌ_一…竭_二ツキヌ_一」(巴上) (津、辞字門)とあるので、右に挙げた中国側の例の「屈」

は「つきる」の意味と推定される。

次の中国側の二例の「屈」もこの意味と推定される。

⑧儼然立_二於四虚之道_一、倚_二於椅梧_一而吟。目知窮_二乎所欲見_一。力屈_二乎所欲_一逐_二吾既_一不_レ及_二已_一。夫形充_二空虚_一。乃至_二委蛇_一。委蛇。故怠。(莊子、卷之五、天運第十四)

⑨賛日、安平立_二節_一、雅性貞亮。高密含_二和_一、宗室之望。新蔡遇_二禍_一、忠全元喪。譙門狗_二義_一、力屈_二志揚_一。黜_二自貽_一威、名隕_二身亡_一。順不_レ恤_二忌_一、流_二播遐_一方。(晋書、列伝第七、安平獻王)

そこで、さきに挙げた例④⑤⑥の「屈す」を「つきる」の意味とすると全文の意味は通じるのであるが、ここで注目すべきことは、これらの「屈す」の主体が、さきにも述べたように、精神の力や肉体の力に限られているのに対して、中国側の「屈」の語の主体は、⑧⑨のように「肉体の力」「心身の力」の場合もあるが、その他の例のように、それらに限られないことである。

また、文中に「屈」の主体が記されていない場合でも文脈の上から、それが推定され得る。

すなわち、公家日記において「屈す」が「つきる」の意味で使用される場合には、その用法が限定されて、その主体は「精神の力・肉体の力」に限られるのである。

さて、そこで、本稿のはじめに挙げた「屈す」の単独用法の場合の意味について更に考察を加えてみよう。

「屈す」と文脈上、深い関連をもつて共用されている語や語句との関係から、「屈す」は「身体(心を含む)」が悪い状態になる「意味と推測されたが、この意味も、「屈、竭也」「屈、盡也」という、「つきる」の意味から出ているのである。

すなわち、「屈す」が「つきる」の意味で、その主体を伴って使用される場合には、語の用法が限定されて、「精神の力・肉体の力」について云う場合にのみ使用されたために、その意味が「(精神の力・肉体の力)がつきる」となり、更に「屈す」が単独で使用されるに及んで「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味となったと推定される。

さきに挙げた「屈す」の語の単独用法の諸例は、「屈す」を「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味にとることによって全文の意味は通じるが、更にこれを支持する事実を以下に述べる。

『今昔物語』に、

③〇其時、外道、高樓登見^{タカトウノミ}、佛、家家追給^{ケケノオヒ}、日高成^{ヒタカナリ}、供養不受^{クヨウノウス}疲極^{ツキ}返給^{マゼ}、女弁^{メノハ}、於水受^{ミヅヲウケ}咒願^{クワン}給見^ミ、(以下略) (卷第一、佛、入婆

羅門城乞食給語第十一、一、76)

③1太子、此見退返^{コノミノセ}給、舊堀魔羅^{フルマ}叫追行^{ケイツイコウ}疾逃^{ハヤニガ}給、遲追^{オソツグ}故、太子前立給^{ミナマエニタテ}、舊堀魔羅^{フルマ}疲極^{ツキ}不追付^{ツグナク}。(卷第一、舊堀魔羅、切佛指語第十六、一85・10)

③2然^{シカレバ}不罷行^{フセヨク}程^{ハカリ}、極^{ツキ}我命可^{ワタシノイノチヲ}絶^{ツグ}、菓^{クワ}・蔬^ソ拾^{ツク}爲^ニ山野龍^{ヤマノリウ}出^デ、間^マ、此子共^{コノミナト}師子預^{シシノゾク}師子預奉^{シシノゾクヲホム}。(同、卷第五、師子、哀猿子割肉与驚語第十四、一363・9)

とある「疲(羸)極」を、日本古典文学大系本(昭和40年2月発行)では「疲(羸)極」と読み、校注者は第一巻の補注の項で、「ここにおいてか、上の疲もしくは羸と下の極とは同義にして、しかも上は訓により、下は音に基く、一種の重言たることを知る。」と述べられている。

とすれば、

③3〇右府疲^{ツキ}屈^{マギ}給^{タマフ}了云云、尤不便事也、(春記、長久2・3・27)

の「疲^{ツキ}屈^{マギ}」は、上下同義で、上は訓により、下は音に基く一種の重言と理解してよいことになり、「屈す」は「疲れる」の意味と見てさしつかえはない。

また、時代は下るが、『温古知新書(尊經閣文庫本)』に「羸^{ツキ}、同屈^{マギ}(態云門)」と見えることも、「くたびる」が「疲れる」と類義語であって、「くたびる」の方が時代的に後出の語であることを考えると、「屈す」の語を「疲れる」の意味に理解してよい一つの証左といえよう。

なお、「困^{ツマ}ず」は仮名文学語、「疲る」は漢文訓読語と云われている、両者は位相語である。前述の『日本古典文学大系本今昔物語』の補注で、校註者は、「困」の字面の代りに「極」字があてられるべき場合のあることを述べられているが、「困ず(極ズ)」「疲る」と同様に、「疲れる」の意の「屈す」も記録語―主として記録体によって記された文章に見える語―であって、位相語である。

従って、今昔物語には「疲(羸)極」^{ツキ}とあり、平安時代の公家日記には「疲^{ツキ}屈^{マギ}」とあることは、今昔物語の文章と平安時代の公家日記の文章との位相差を示すものである。

また、「吾妻鏡」に、

③4北條殿父子三人、亦与^{モトモト}景親等^{ケイシントウ}。依^{ヨリ}令^{ノミ}攻戰^{クウセン}給^{タマフ}。筋力漸疲^{ツキ}兮。

(治承4・8・24、3)

③5義澄等雖^{モトモト}相戰^{サウケン}。昨^ノ由^ユ今^{イマ}兩日合戰^{リウニチカウケン}。力疲矢盡^{ツキヤツクシ}。臨^{リン}半更^{ハンメイ}捨^{スツ}城^{シヤウ}逃去^{ニガヒ}。(同、治承4・8・26、4)

とあって、「筋力漸疲」「力疲」とあることは、例①に「筋力已屈」、

②②に「力屈」とあることと比較すると、『吾妻鏡』の文章と平安時代の公家日記の文章との位相差を示すものである。

(二)

ここで、平安時代の仮名文学の方面に目を転じてみよう。

③⑥ひるは、さてもまきはし給ふを、ゆふくれとなれば、いみしく給へは、かくては、いかてかすこし給はむと、なくさめわひて、めのともなきあへり。(源氏物語、若紫)

③⑦ひめ君、いかにつれ／＼ならん、ひころになれば、くしてやあらむと、らうたたくおほしやる。(同、花宴)

③⑧(前略)院には、猶、このたいにのみのせさせ給なめりな。かのおはんおほえの、ことなるなめりかし。この宮、いかにおほすらん。みかとの、ならひなくなはしたてまつり給へるに、さしもあらて、くし給にたらんこそ、心くるしけれと、あいなくいへは(以下略)(同、若菜上)

③⑨(前略)もてまいりて、みれば、ひめ君ふたところ、うちかたらひて、いと、いたうくんしたまへり。(同、竹河)

〔以上は、池田亀鑑氏著『源氏物語大成 校異篇』による。〕
〔句読点は私に施した。以下も同じ。〕

④①今、猶此の御返事たてまつらんとて、取りむかふに、人々、かたちめなど、神の事申にまいり給へれば、西おもてに居て、物聞えなどするにまされぬ。こと人はた、さしてえたらん人こそせめとて、やみぬ。猶、此の事にすくせなき日なめりとかんして、今はいかて、さなむいきたりしとたに、人におほきかせしなとわらふ。(三卷本枕草子、第百四段、五月の御さ

うしのほとしきに)

〔田中重太郎氏編著『校本枕冊子』(古典文庫)による。句読点は私に施した。〕

④②面影におぼえて悲しければ、月のけうもおぼえず、くんじ臥しぬ。(更級日記)

④③「心にまかせて遊びたはぶれして、待ひよかりぬべく、君の、いといたくくんじたまへる御心をも、『世の憂きよりは』と、思しなぐさめさせん」と、(以下略)(夜の寝覚、卷二)

④④身のおぼえかたはしに、いみじくくんじ卑下せられて、かくてものし給ふほど、むかしよりの心のうちを、あはれとも、心憂しとも、きこえ知らせんとて、(以下略)(同、卷三)

〔右の例④①④③は『日本古典文学大系本』による。④②④④の「くんじ」は「屈じ」とあるが、大系本の底本の表記に従って改めた。あとで挙げる『落窪物語』の例も同じ。〕

右の諸例の「くす」「くんず」は、すべて「心が沈む」の意味であるが、平安時代の仮名文学では、この意味で用いられる場合がほとんどである。

次に、右の例③⑨の「くし」について、『蝦江入楚第五』(国文学註釈叢書七)に、

いみじうくし給へば ことのほか屈したる也。

とあって、「くし」を「屈す」の語と解釈している。

「くつす」が「くんず」となる語形の問題については、平安時代に促音の「ツ」も撥音の「ン」も共に「レ」の如き符号で表記せられていたので「くつす」が「くんず」ともなったという説(たとえば、『源氏物語』の『日本古典文学大系』の補注)が一般的である。

以下には、「くす」「くつす」「くんず」を代表して「くつす」ということにする。

それでは、なぜ、「くつす」が「心が沈む」の意味を表すようになったのであろうか。

佐藤喜代治氏は『日本の漢語』（角川書店）の中で、

(44)高祖因狎^一侮諸客。遂坐^二上坐^三無^レ所^レ詘^一。(漢書、高帝紀)
の「詘」を「ひるむ」の意味であるとして、「詘」字は「屈」の古字であり、「源氏物語」の「屈す」はこの「詘(屈)」の意に基づくのであろうが同一ではないとされる。

しかし、筆者は、この「心が沈む」の場合も、「屈、竭也」「屈、盡也」すなわち「つきる」の意味が基になっていると考える。

平安時代の公家日記に見える単独用法の「屈す」は「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味であり、詳しくは「精神の力・肉体の力が尽きる」の意味であった。その場合の「精神」とは、体の機能や組織の面における精神であり、言い換えれば、生理的な方面での精神であるが、仮名文学の「屈す」は、感情的、情緒的な面における精神、すなわち生理的な精神に対して、心理的な方面での精神が尽きるの意味であることから「心が沈む」の意味を表すと考えられる。

なお、

(45)少将、落窪の君とは聞かざりければ、「何の名ぞ、落窪は」といへば、女いみじくはづかしくて、「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なうくしたる人の名ならん。きら／＼しからぬ人の名なり。(以下略)(落窪物語、巻之一)

(46)みちかひにてたに、人か、なにそとに、御覧しわくへくもあらす、まつ、をひはらひつへきしつのおの、むつまじう、哀に、

おほさるゝも、われながら、かたしけなく、くしにける心のはと、思ひしらる。(源氏物語、明石)

の「くつす」は「卑屈になる」の意味であるが、「心が沈む」の意味から転じたものであろう。

ここで、公家日記に見える単独用法の「屈す」と仮名文学における「くつす」の異なる点をあげると、前述の「精神的な力が尽きる」の「精神」の質の違いは、公家日記の方には「肉体的な力が尽きる」の意味があつて、人以外に牛、馬などについてもこの語が使用されるが、仮名文学の方にはこの意味がなく、従つて人についてのみこの語が使用される。また、仮名文学の方では、「くつす」が他の語と複合して、「言いくつす・うちくつす・思ひくつす・おぼしくつす・物思ひくつす・くつしいたげなり・くつしいたし・くつし入る・くつししめる・くつししをる・くつしすぐ・くつしはつ」などの複合語をつくるが、公家日記では、前述の「疲れ屈す」の重言の場合を除いてこの用法はない。

(三)

『小右記』に次のような記述が見える。

(47)桑糸二疋、綿二屯、遣雅菜頭為成人許、从去年或病、或思、或窮屈、至今不出仕、無衣裳云々、仍所給、(万寿2・2・2)

右の例の「窮屈」は、「病」「患」という、「身体が正常でない状態になる」意味の語と並列して使用されている。

また、少し時期が下るが、『明月記』に、

(48)今日昨日事不発、只咳病猶以無術之上、心神窮屈無為方、(正治2・11・1)

とあるので、「窮屈」という語は、肉体だけでなく心についても使用されることがわかるが、本稿の(一)に挙げた同じ日記の、例(2)の「依心神屈不出行」と比較すると、「窮屈」と「屈す」とは同義の語ではないかと推測される。

そこで、「窮」の語義を調べると、

(49) 指窮_三於爲_二薪。火伝也_レ不知_二其盡_一也。(莊子、養生主第三、第五爲新説)

の郭象の注に、「窮、盡也。」とあり、また、

(50) 二人交射、中路矢鋒相觸、而墜_二於地_一而塵_レ不揚。飛衛之矢先窮、紀昌遺_二一矢。(列子、湯問第五、第十四章)

の「窮」は、「飛衛の矢がまずつきて、紀昌は一本の矢を残していた。」というところに出てくるので、「つき(尽)る」の意味である。

また「西大寺本金光明最勝王經平安初期点(春日政治氏著『西大寺本金光明最勝王經古典の国語学的研究』△勉誠社Vによる)」に「窮くること無し」と見えるので、前述の「屈」の語義と同じく「つきる」の意味であって、「窮屈」は「つきる」の意味の連文ということになる。

そこで、「窮屈」を公家日記の「屈す」と同じように「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち「疲れる」(ある場合には「からだに弱る」の意味にとると例(47)(48)の全文の意味は通じる。

以上に述べたことから、次の

(51) 盛長来云、殿御使也、命云、定窮屈如何、明日院前駟馬為之如何、承給了、(後二条師通記、寛治6・4・20)

(52) 天皇、還_二御土御門内裏_一、予依_二窮屈_一不参、(台記、康治1・

11・19)

(53) 連日窮屈、病身誠以辛苦、已時許忽振出、(明月記、正治2・10・29)

(54) 已時大僧正被来訪、参北野、平野、清凉寺、法輪寺、更無窮屈之氣、^{十六人}(明月記、嘉禎1・5・3)

の「窮屈」は、公家日記の「屈す」と同じく「疲れる」の意味で使用されている。

また、公家日記ではないが、『新猿楽記』にも

(55) 年十八。容顔美麗。放逸豊顔也。一偏立_二妖艶之道_一。未_レ嘗知_二世間之上_一。雖_レ然養_二沈論窮屈之性_一。罷世路喧囂之思。

のような例が見えて、この「窮屈」も公家日記の場合と同じ意味である。

『明月記』には、「窮屈」という語がよく使用されていて、これを佐藤喜代治氏は、前述の『日本の漢語』の中で、「体の苦痛を言いつすのに用いている。」と述べておられるが、前述のように「疲れる」(ある場合には「からだに弱る」)の意味や原義のままで「精神の力・肉体の力がつきる」の意味で使用されていると筆者は考える。なお『古事談』に、

(56) 南京永超僧都ハ無_二魚肉_一之限者。叱非叱モ都_レ不_レ食之人也。公請勤_二テ在京之叱久_一不_二魚食_一。窮屈シテ下向之間。於_二十六堂_一辺一屋破子之叱。弟子一人近辺ノ在家ニテ魚味ヲ乞_二テ令_レ勸_二之_一云々。(第三 僧行) △国史大系本V

とある「窮屈シ」は、「精神の力・肉体の力がつきる」の原義から「からだに弱る」の意味で使用されている。

また、『高山寺本古往来表白集』△東京大学出版会Vに、

切而頃一年相一就因縁経一廻一外土適還京都貧遺為宗每見窮屈之^{オクシツク}

愁弥増哀憐之思

〔返点は省略。付訓も必要な部分のみを記した。〕

とある「窮屈」は、『色葉字類抄』に「窮屈^{●食時分}」(木、疊字門)

キウクキツ

とあり、また文脈の上からみても「まずしい状態」の意味を表す語と推定されるが、この場合は、「窮、盡也」すなわち、「つきる」が金銭の方面に使用せられて「金銭がつきる」の意味から「まずしい状態」の意味になったと推定される。

さて、公家日記においては、

〔58〕今日窮屈察思食、退出可休息之旨有勅定、(経俊卿記、正元1

・6・5)

〔59〕予帰北山、^{千時西}夕座饑法如例、窮屈無治術、(公衡公記、弘安

終刻)

6・8・7)

〔60〕改元已下事、不盡之間、尋申右相、返報統之、^(寄)

自是可申之由思給候処、兩条伏議始終奉行、至辰三点退出、窮屈以外候之間、于今平臥候つ、仍于今不令申候つ…(中略)…群議之趣、此間以泰尚朝臣委可令申候也、窮屈猶惘然之間、併令省略候也、(園太曆、延文1・3・29)

〔61〕一献後入御之間、余退出、依窮屈也、(兼宣公記、嘉慶1・1

・7)

〔62〕右兵衛督亭へ倉部・教豊・徳菊丸罷参、予聊窮屈之間不出、姫御料罷向、(教言卿記、応永13・1・13)

のように、中世に入っても「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち、「疲れる」の意味で使用されている。

ところが、『日葡辞書』(土井忠生氏他編訳『邦訳日葡辞書』八岩

波書店Vによる)に、

Qinut. キョウツツ (窮屈) すなわち、Qinotugumaru coto.

1, taicut. (衆の語すること。または、退屈) 倦怠を覚えること、または、減がつきること。

とあるように、

〔63〕早旦退出、行水、今日安閑窮屈之間大略終日平臥、(実隆公記、文明8・1・22)

のような例が室町中期頃になると現れる。

右の例の「安閑」は『日葡辞書』に、

Ancan. (安閑) Yasugu, xizucana. (安く、閑かな) 平和、

あるいは、寧靜。

とあるので、右の「窮屈」は「退屈」の意と推定される。

なお、ついでに付け加えると、「窮屈」の語が「狭苦しい、不自由だ」という今日的な意味になるのは、佐藤喜代治氏が前述の『日本の漢語』の中で挙げられているように、『大蔵虎明本能狂言』の、

〔64〕こなたのお屋敷がせばうござって、御きうくつに御座らうと思し召し、あなたに広々とした屋敷をとっておかされてござるほどに、(以下略)(武悪)

の例の頃からであらう。

『太平記』に、

〔65〕丹誠無二ノ御勤、感応ナドカアラザラント、神慮モ暗ニ被計タリ。終夜ノ礼拝ニ御窮屈有ケレバ、御肱ヲ曲テ枕トシテ暫御目睡在ケル御夢ニ、(巻第五、大塔宮熊野落事)

とある「窮屈」について、日本古典文学大系本の頭注に「心身の不自由なこと」とあるのは、時代的に見て無理であって、「疲れること」

という意味と理解すべきである。

さて、後になってしまったが、「窮屈」の語は、中国側ではいかなる意味で使用されているのであろうか。

たとえば、

〔66〕君之不令民、父之不孝子、兄之不悌弟、皆鄉里之所釜鬻者而逐之。憚耕稼採薪之勞、不肯仕官人事、而折美衣修食之樂、智巧窮屈、無以爲之。屈盡、〔呂氏春秋・卷十、安死〕

とあるように、右の例の「窮屈」は、「窮、極」「屈、盡」と注があり、「窮」は『観智院本類聚名義抄』に「キハム^{マル}。」とあるので、

「窮屈」は「きわまりつく」の意味となるが、前述のように「窮屈」を「つきる」の意味の連文と見て、右の例の「智巧窮屈」を「知恵と技巧も尽きて」と解釈することも可能ではないかと考える。

この考えが許されるならば、わが国の「窮屈」の語の意味は、「屈」の語の場合と同じように、中国側の、連文としての「窮屈」の用法が限定されて、「窮屈」の語の主体となるもの—何が「つきる」のかの、「何が」にあたるもの—が限定されたところから成立したということができる。

以上に述べてきたことをまとめると、次のようである。

「つきる」という意味の「屈す」という語は、中国側の「屈」の語の用法が限定されて、「屈す」の主体が「精神の力・肉体の力」にのみ限定され、次に、「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち、

「疲れる」（ある場合には「からだが弱い」の意味となって「屈す」の単独用法が生じて、それらの例は平安時代の公家日記に見える。そして、この場合の「精神」とは、生理的な精神であるが、これが心理的な精神となる一方で、「屈す」が「肉体の力」を主体としなくなり、「屈す」が「心理的な精神がつきる」すなわち、「心が沈む」の意となって、仮名文学における「くっす（くんず）」が成立する。わが国における「窮屈」の語もまた、中国側における「窮屈」の語の用法が限定されて成立したものであって、公家日記における、「屈す」の単独用法の場合の意味と同様に「精神の力・肉体の力がつきる」という意味を原義として、「疲れる」（ある場合には「からだが弱い」の意味を表すが、この語は「屈す」よりも多義である。なお、公家日記に見える単独用法の「屈す」は、記録語という位相語であることも見過ごしがたい事実である。

○本文中に明記しなかった使用テキスト

荀子・呂氏春秋・淮南子・太玄経―四部叢刊、列子・莊子―漢文大系、晋書―和刻本正史、

小右記・後二條師通記・殿暦―大日本古記録、左経記・春記・中右記・帥記・台記―増補史料大成、公衡公記・園太暦・兼宣公記・教言卿記・実隆公記―史料纂集、玉葉―すみや書房、明月記―国書刊行会、吾妻鏡―新訂増補国史大系、経俊卿記―図書寮叢刊、明衡往来（雲州消息）・新猿楽記―群書類従、